

あを

9

2011



秋祭



恩田秋夫の
一茶俳句切手



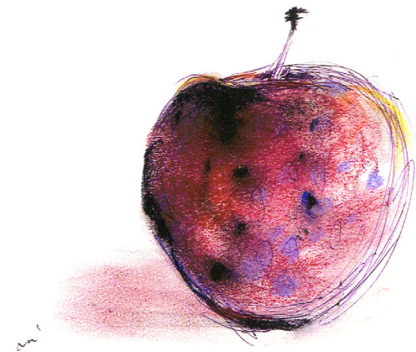
夕暮の虫を鳴する団扇哉
 鳴けよ虫秋が鳴かずに居らりふか
 行燈にちよつと鳴きけり青い虫
 きさがたや浪の上ゆく虫の声
 吹降や家陰たよりて虫の声
 虫鳴くや表町は夜も人通り
 虫の声しばし障子を離れざる
 我窓や虫もろくなはおらぬ也
 夕暮や箒木投ても虫の鳴
 青い虫茶色な虫の鳴にけり
 暮る日をさう嬉しいか虫の声

一茶

先生は一茶俳句の他には芭蕉・蕪村をとりあげられてゐた。初期の頃は現代俳句も作品化してをられた。加藤楸邨の「雉子の眸のかうかうとして売られけり」を覚えてゐる。私の『青写真』から一枚作つてくれるといふありがたい話があつた。私は丁度その頃『禪』の編集で頭がいつばいでその代はりにとカツトをお願いした。今思へば返す返すも残念である。

あそ

九月



花影

花影や人を待たせてあるごとし
トランプに紛れ込んだる青蜥蜴
青葉闇鋼のやうに水を置く
噴水は白髪のやうにおりてくる
少年の悪書をひらく花火の夜

本町三 佐藤喜孝

白桃

白桃の珠玉の滴り丸嚙り
鷗外忌鯖の味噌煮を嫌ふわけ
土用丑紀文のうなぎ湯煎して
御器嚙をはなはだ嫌ふいはれとは
前世の何の因果で御器嚙に

川崎・小田栄 木村茂登子

星 今 宵

京 橋 篠 田 純 子

星今宵叔父は仏の弟子となる
法名はふた文字といふ涼やかさ
炎暑の日麻布更級蕎麦湯かな
鳩居堂涼しきかをり購へり
ばあさんの駆込み乗車酷暑の日

雲 の 峰

劔^{つるぎ}地^ぢ東^{あづま}出^で 定 梶 じよう

戸袋に蜂の出てくる節の穴
苺このつぶつぶが種とは知らず
風鈴に風が出てきてひとりなり
杭一打一打や育つ雲の峰
蜘蛛の糸今しがたなみふりにけり

▽

所 沢 須 賀 敏 子

金柑の花の白さや余震あり
受付に団扇の並ぶ接骨院
八ヶ岳時々隠す夏の雲
父と子のサッカーボール緑蔭へ
梅雨明けるミニスカートの短かさよ

▽

浦 和 竹 内 弘 子

水無月やぶだうの蔓のみなおよぐ
朝刊をとりに出て蟻おどろかす
呼出しの半纏あをき夏衣
世に疎きことをたのしむ青瓢
梅雨ふかし輪禍のあとの硝子片

水 葉

紫陽花や昔はありし水葉
竹活けて独りの寝間の涼しかり
全集の一冊足りず夏の月
夏燕小さく重き曾孫抱く
みんなの鳴きつるのみ昼森と

田 端 田中藤穂

J R 富田駅

遂に無人鉄道変遷惜しむ夏
風涼し昔のままの大きな駅舎
自販機の音に驚く夏の午後
七月の木の椅子に坐す無人駅
無人駅自転車置場の朱夏

富 田 長崎桂子

▽

凌霄花しづまり返る昼下り
待ち人の来たるがごとし青揚羽
あをあをと青田のあをの波うてる
取れたての玉葱吊す大廂
夕蝸サスペンスめく藪の中

大 宮 早崎泰江

八 月

遠廻りして百日紅人を待つ
旅人は芭蕉でありし雲の峰
枝豆に上中下品なきみどり
みんなで泣いてビールの泡のほろ苦き
八月の箱を二つに分けてゆく

河 田 町 堀内一郎

少女

落合 森理和

切口を真上に向けて西瓜提ぐ
「ぶつしんは」問はれ戸惑ふ施餓鬼会
放射能なれることなし油虫
鏡台の奥より日の目夏座蒲団
十歳の少女眩しく泳ぎ出づ

▽

鍋屋横丁 吉弘 恭子

夜烏に目で合図して冷し酒
潦一尺うへにある蒼
入り王にとんで香車や団扇風
梅雨籠番鴉と目であそぶ
終戦日同じ時間の朝ご飯

▽

聖蹟桜ヶ丘 安部 里子

ペンキ塗る西日の中の鉄棒に
梅雨寒し一杯一杯李白の詩
生けるもの地球の中の根無草
夏至の日の足をかばひて坐りたる
扇風機家の三台首振中

▽

逗子 鎌倉喜久恵

手の窪に太古の水をしたたらし
緑濃し古今の墓を抱く寺
夕端居風を求めて移りけり
睡蓮の静かに閉ぢて暮れなづむ
夜烏の一声太し溽暑かな

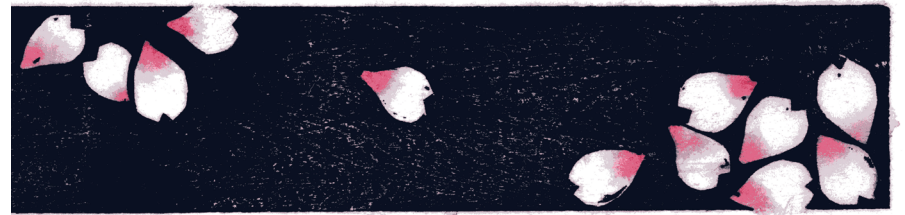
前月作品

羅の群れ江の電の無人駅	書漏らすルビ真夏の夜の二度寝の夢	六月の光飛び交ふ闇にをり	忘れては思ひだす花雲の峰	蝉の穴去年のままなる寂けさよ	待ちかねし馬鈴薯の花白きかな	横たはるわれ魚めく梅雨の底
赤座典子	吉弘恭子	森理和	堀内一郎	早崎泰江	長崎桂子	田中藤穂

喜孝抄

一人一句

チヨットコイとは小うるさき春の鳥	三月を引き摺りながら夏来たり	昼の蚊のほのぼの鳴いて出水の禍	ためらひつつ片白草を手に掛ける	ナイヤガラ瀑布は虹を生みつづけ	海見ゆる蜜柑畑の花匂ふ	はしり梅雨浅草一の一の一
竹内弘子	須賀敏子	定梶じょう	篠田純子	木村茂登子	鎌倉喜久恵	佐藤喜孝



海髪汁やぶりがへるふりかえつたはる

佐藤喜孝

作者は、ふり向くふり返る、という動作をするのが人間である、と。確かに。

菱川師宣の「見返り美人」図は切手となって世に膾炙してまずし、大阪の川柳では

今飲んだ蟻舟橋でふり返り 佳汀

は、一度だけそんな経験をした評者へ私に懐かしい風景です。あるいは俳句では

ふるむけばみんなひよつとこ十三夜 山口澄子

があつて、十三夜の月光にふり返った人の顔がみんなひよつとこに見えたという。あるいは作者のみがふり向いたのかもしれないが、いずれにしろ「ふり返る」という動作がこれらの句には必要だったのです。そしてまた

寒行僧こともあらうに振返る 鈴木鷹夫

は、「振返る」という挙止だけをとりあげて、寒行

僧が、よりによってそんなことをしようとは、と慨嘆しているのです。ふり返ることが、人にとって特別の挙措であることの証左でしょう。

さて、上句の「海髪汁」。ずっと昔は、海髪のりは木灰にまぶして保存したものです。時には汁の具にもしました。

そんな海髪汁を口にしながらふりかえつたのでしょうか。だからこそ、そんな挙措が特別なものになつたのでしょうか。中七以下をかな書きにしたのは、逆に、そんな挙措をやわらかく表現するためかもしれません。

肩書を脱ぎすててまづ更衣

鎌倉喜久恵

肩書をすてることと更衣は、本来何の関係もない筈。だが喜久恵さんは、肩書を捨てると同時にともかく、まず夏服に着替えた、という。面白い措辞。

何らかの職を辞したのでしよう、偶々その日衣を

更えた。それを「まづ」ということばに集約して一句にしたてた。

ためらひつつ片白草を手に掛ける

篠田純子

片白草は気持のいい草ではない。それが「ためらひつつ」の措辞になつたのでしよう。そして、「片白草に手を掛ける」のではない「片白草に手を掛ける」のです。

「手に掛ける」は連語で、辞書によると、手塩にかける、世話をする、等の義と共に、自らの手で殺す、という意味もあるようです。掲句の原義はどこらにあるのでしよう。

俳句の読みの面白さの一つに、作者の詠みとは別に、読み手独自の解釈鑑賞のしかたがある、ということがあります。文芸は、発表されたらあとは独り立ちするもの。殊に短い詩型の俳句ではそうでしょう。

『俳句四季』の渡辺誠一郎さんの文によると、佐藤鬼房の有名な句

切株があり愚直の斧があり
は、その時の作者、その読みを「ぐうちよく」と思い込んでいたらしい、とあります。そして、一般の読み手は「ぐちよく」と正しく読んで、中七の字足らずをよしとしたのです。

句がひとり歩きましたのです。しかしここで鬼房さんの味方をすれば、「愚」の字は中国音では「ぐ」ですが、日本での慣用音では、この字を旁りとする語は全て「ぐ」です。「愚」だけが「ぐ」の音を保っている。多分、経文の読みを保持している故でしょうが、若き日の鬼房さんが「ぐうちよく」と読んだことの方がまっとうなのかもしれません。

さて「片白草」です。この草は鉢に大切に育てるようなものではない。いわば雑草ですから、それが「ためらひつつ手に掛ける」の措辞になつた。あの臭気が鼻先によみがえるようです。

遠目には越のやうなる鳩の雛

竹内弘子

鳩の巢の上の雛は、親もそうですが、しつ尾があ

『俳句』1月号増刊

俳句年鑑 2012 年版

12月上旬発売予定 予価2500円(税込5%) ※品切れに
「予約」がない。

口絵 ● 二〇一二年一〇〇〇句選…片山由美子選
写真でたどる 二〇一二年の俳壇 …高野ムツオ

【巻頭提言】……………

年代別 二〇一二年の収穫 ……

諸家自選五句……………約七〇〇名!

新企画 今年の感銘句

今年の句集BEST15 / 今年の評論BEST5 / 『俳句』の一年
俳壇ニュース総集編 / 俳文学展望 / 各俳句賞のひとりとほか

【エッセイ】東日本大震災に思う

【合評鼎談 総集編】西村和子・対馬康子・小川軽舟
今年の秀句、そして諸問題(平成俳壇に心に残る秀句発表↓)

●全国結社・俳誌 一年の動向(都道府県別目次付き!)

●全国俳人住所録(二七〇〇名を) 挙掲載!

【読者投句欄】平成俳壇スベシヤル ●豪華賞品多数!

発行:角川学芸出版 TEL03-3817-6961 発売:角川グループパブリッシング TEL03-3238-8528

通学の頃は省線柿の花

田中藤穂

柿の木はどこにでもあつて、もつともありふれた樹木ですが、さてその花となると、ことし見なかつた、気がつかなくつた、ということが多い。梅雨入りの前に咲くのは、虫が媒介する花だからでしょうか。

りませんから、頸をのぞけばまさにまん丸だったのでしよう。そして遠目とありますから、岸部から離れた、と言つても、支柱となるべき葎などの生える、もつとも遠いところに巣をつくるのです。

私は見たことありませんが、友人によると、綿毛のあいだは首の辺りに白黒の縞もようがあるそうです。弘子さんがご覧になったのも、そんな時ではなかつたでしょうか。

鳩はたくさんいる鳥ではありませんし、まして浮巢に雛を見ることは一時期しかないわけですから、幸運といつていい。そのめぐまれた運をすなおに定型にした。

毎月25日発売 定価900円(税込) 月刊 俳句界 2011年 11月号

特集 『俳句における』
「通俗」と「品格」

◎俳句の通俗と品格 横澤放川 江里昭彦
◎作家に見る品格と通俗
飯田龍太 / 三森鉄治 桂 信子 / 吉田成子
藤田湘子 / 南十二国 鈴木真砂女 / 鳥居真里子 長谷川 權 / 西村麒麟 大木あま / 山西雅子

特別作品 大峯あきら 復本一郎
俳句界NOW 鈴木鷹夫 鈴木節子

◎作品3句
夢枕 嶺山光三郎 安部譲二
石牟礼道子 三田完 小林恭二他
◎論考 藤原龍一郎 今泉康弘 島村正
◎俳句史を彩った文人俳句
北原白秋 川端康成 三島由紀夫
太宰治 宮澤賢治 井伏鱒二他

文人俳句特集II
震災句集『白い戦場』刊行記念対談
角川春樹 VS 辻井喬 ……地の被作品集
◇鑑賞 小池昌代(作家) 3-11のその後

魅惑の俳人 野村喜舟
佐高信の甘口でコンニチハ!
ゲスト 岸井成格(毎日新聞主筆)

(新作三句)
山崎房子 岸本マチ子 田島和生
澤井洋子 星野光二 豊田都峰

※一部変更の可能性あります。
株式会社 文学の森
お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com



そんな頃に藤穂さんは、「省線」と言った、現在の山手線で通学したのです。

およそ柿の花は曇天の似合う花ですから、通学の日々はそんな毎日であったことでしょう。今は国電といふ山手線と言つて、「省線」のことばは廃れましたが、だからこそこのことばを上手に使つて句にした。

とりあわせた「柿の花」が、十二分にはたらいっていると思う。

近世俳諧と漢詩文

四六

王岩

山中無暦日といふ題を探りて

月も日もしらずに居れば牡丹咲

天姥

天姥、宮本虎杖の号。寛保元年（一七四一）〜文政六年（一八二三）六月八日。本名、宮本八郎右衛門道孟。別号に古慊・天姥・梨翁・鳳子房などがある。信濃国戸倉の農家に生れ。明和五年（一七六八）ごろ、同地を訪れた白雄に入門、同八年から翌年にかけて白雄に随伴して関西を行脚、業俳をめざした。編著に『つきよぼとけ』『いぬ榎集』『文化甲子春』などがある。問題の句は『みはしら』（百堂編）に出自する。句題に見える「山中無暦日」は晩唐の太上隱者の五言絶句「答人（人に答ふ）」に由来した。

偶来松樹下、

偶 松樹の下に来たり

高枕石頭眠。

枕を高くして石頭に眠る

山中無暦日、

山中 暦日無し

寒尽不知年。

寒尽くれども年を知らず

因みに、『老の春』（猿左編）という俳書には、路人という俳人の次の作品も載せてある。

寒尽不知年

春たつや石ぬけ落る日向山

路人

路人が句題として使ったのは、太上隱者の「答人」詩の結句である。これは『唐詩選』に収録されたので、近世俳人たちの教養中にある唐詩である。

人の子のものいひそめし春日哉
岡の蝶ながめは春につきぬ也
春風やふと吹れたる神詣
人の身も夏野の艸もてる日かな
桜遠く夢のこゝろよ昼の月

観音に誓つて花に死んかな
夜桜や世に阿類もの迎馬
花の願ひ花野の露となる身かな

『つきよぼとけ』より

あをかき集

田中藤穂選



佐藤 喜孝

アイスクリーム舐め行動を修正す
震災原発無条件降伏嫌だ
夏枯梗無縁仏をてらしをり
ひと筋の風を捉へて夏の夢
昼顔が朝から咲いた負けないぞ
一羽だけ首のかそけき燕の子

篠田 純子

水芭蕉水に抗して水が好き
木道をすれ違ふべき夏の女
夏の果地塘のひとつから呼ばれ
峠路はふり返るもの夏の湖
郭公を頂点として尾瀬ヶ原
梅雨明けのついでに職を退くべきか
燈台の白が截然青岬
鶉のくぐるところ浮んでくるところ
ある時は月が並走帰省バス
合歡の葉のそよぎ止まずよ滝行者
これ着ればきつと風吹く白紵
よちよちと畦道ほじる鳥の子
堤防に自転車漕ぐ青葉風
初蝉や今朝の青空広くして
初蝉や洗濯干せば翻る

長崎 桂子

梅雨明けの川魚捕る小舟かな
梅雨明けや岸の叢濃く深し
町灰色雨風叩く夏台風

須賀 敏子

羽抜鶏陽に染む鶏冠持ちあぐね
西日の矢放射線の矢は見えず
待たされてゐる間の馳走扇風機
夏雲の千変万化真昼のショー

木村茂登子

青柚子がポトリポトリとアスファルト
睡蓮に鯉近づくを待つカメラ
昼過ぎて蓮は大方睡りけり
蓼科の峠で見えし花あやめ
早々と背丈越されぬ向日葵に
七月もアイスランドは白夜なり
高層ビル水にゆらいで涼み舟
ハッピ着て祭の男の子三代目
海よりも山に降ってこそ緑雨
片耳にピアス八個やアロハシャツ
葎すだれ増えて酷暑の町の窓

鎌倉喜久恵

日盛りはかくれんぼのごと動かずに
日焼して可愛さ少し失せにけり
節電のゴーヤの日除黄花つけ
蠅叩まともに打つにためらひが
ジェル化する空気絶へ絶へ施餓鬼会
霞ヶ関着用義務付けあつぱつぱ
夕涼み我は梅酒を所望せる
姫バラの青虫みつ雀かな
枝豆の凸のままある空の莢
殊のほか月はればれと梅雨明けし
人たえし昼の公園蝉しぐれ

森 理和

早崎 泰江

不揃ひの胡瓜にどこか安堵あり
カサブランカ二輪車首出す塀の外
昼顔の次ぎ次ぎふえる花の数
隣家の声大きくひびく夏の窓
入り違ふ春の障子に影うごく
看板に入山形を氷水
鯨魚取浜にならびし鱒船
入谷からひとり春日の不忍池へ
長袖のしみをとりみて梅雨の入
入れ知恵を耳打ちされる隠れん坊

吉弘 恭子

アイスクリーム舐め行動を修正す

純子

「水芭蕉水に抗して水が好き」の句に比べ、こち
らは流動的、柔らかく甘く冷たいアイスクリームを
舐めてというのがいい。修正は前進です。大いに応
援したいです。

震災原発無条件降伏嫌だ

純子

どう見ても季語はない。俳句として成立するかも
大変疑問な一句です。でも、これは、震災や原発に
ともなういろいろな問題に、屈したりはしないぞ、
負けてたまるか、という心底からの叫びが聞える気
がして、日本の大勢の人の心を代表している句とし
て取上げました。

佳句後言

一羽だけ首のかそげき燕の子

純子

テレビなどで見ていると、親鳥から餌をもらうの
は元気で生命力の強い雛が沢山もらっているように
見える。この燕の子は一番最後に卵からかえった小
さくて弱い雛だったのか。他の燕の子に比べて首の
あたりが細くてしっかりしていない。果して他の燕
の子のように、ちゃんと成長出来るだろうか。かそ
げきは、かすかなさまで、首の表現にあてはまるか
なとも思いましたけれど、弱々しげな燕のこの様子
と、それを心配と愛情をもって見ている繊細な心が、
かそげきで上手くまとめられていると思います。
一羽だけ、に心をひかれます。

水芭蕉水に抗して水が好き

喜孝

水芭蕉は、初夏がくると山地の湿原に群れをなし

木道をすれ違ふべき夏の女

喜孝

向こうから来る女性は、きつと恰幅もよく、服装
も夏らしく派手で、露出度も高いのかも知れない。
狭い木道なのだから、どうしてもすれ違はねばなら
ない。作者の気持は大分退いているようだが、ちよっ
ぴりときめいているかも……。

夏の果地塘のひとつから呼ばれ

喜孝

夏の間あちこちと旅をした。その中で巡り会った池塘に一つ、何故か心を離れないのがある。夏ももう終ろうとしているがもう一度あの池塘へ行ってみたいと思う。呼ばれているような気がしてならない。

梅雨明けのついでに職を退くべきか じょう

「ついでに」は諧謔でしょう。重大なことを軽く言っておられますが、決断するということは苦勞なことです。どうぞ誤りのないご決断を!!

これ着ればきつと風吹く白紺 じょう

白紺は本当にきつぱりと涼しげ、それに和服はゆったりしていて、あちこちから風が入って気持ちがいい。これ着ればきつと風吹く、というのは、これ

私の家も西日の当る縁側に葎すだれをかけた。災害が、昔からあるものの良さをもう一度気付かせてくれたようである。

霞ヶ関着用義務付あつぱつぱ 理和

「あつぱつぱ」は広辞苑に、夏に婦人が着るだぶだぶの単服、関西地方で言い始めた俗語で、大正末期以降広まる。とある。生涯和服で通した私の母なども、夏は暑さに耐えかねて、姉の縫ってくれたあつぱつぱを着ていたのを思い出す。

までの経験からか、それとも願望か。少々オカルトめくが、面白い句だと思いました。

図書館の道まだ青き烏瓜 敏子

素直な気持の良い句ですね。秋に真っ赤に熟れるまでに、何度その道を通るのでしょうか。その度に眼を止めて、楽しみに見ることでしよう。

葎すだれ増えて酷暑の町の窓 喜久恵

三月十一日の福島の子力発電所の事故以来、節電が叫ばれて、テレビでも毎日、本日の供給量とか予定電力消費量とか映し出されるから、おちおちしてられない。それでこの夏の酷暑を乗切るのに、昔ながらの葎すだれを窓にさげている家が増えた。

堀内一郎・ハーモニカの会

11月5日〈土〉

一回目 1時半

二回目 2時半

CAFE 傳

会費 茶菓代

予定曲目

フォスターメロディ集・紅葉・赤とんぼ・月の沙漠
里の秋・ここに幸あり・瀬戸の花嫁・故郷

別所温泉

佐藤喜孝

パソコンに残つてゐるメモをみつけた。一九九九年七月、竹内弘子さんと別所温泉に遊んだをりの句のメモ。記憶もおぼろげであるが纏めておきたくなつた。

若葛はどこも鎌首もたげをり
山門に扉のあらず花南瓜
磐座はひと日木霰苔の花
神のにほひ苔のにほひと梅雨の傘
堂塔のむかうちらちら四十雀
三重塔に猫背の毛蟲をり

にほどりのネッシーのやう梅雨の沼
たましひは簡にして美し栗の花
青蟲の首あげてゐる滝の杭
躑躅咲く小屋を貫く水車の棒
柿若葉水車の小屋の枝格子
地を這ふ南瓜村を逃げたる若者に
梅雨深し仁王後ろによりかかり
若葉光虫に喰はれし薬師堂
鳥にも急ぎの用か梅雨終る
あぢさゐの色仕上りぬ水の音

あを創刊十周年記念句集を読む

『夫と猫』

安部里子

吉弘恭子

この句集の題名になっている猫は安部家にとつては、かけがえのない家族である。我が家にも野良猫の「アリちゃん」が毎夜私の枕に頭をのっけておやすみである。世の中に猫派と犬派とよく言われるが、どちらも飼っていれば分け隔てなく可愛いものである。この8月末日で2歳になった孫はいきものが大好き、道路で散歩中の犬がどんなに大きかろうが「ワンワン」と両手を出して寄っていつて飼い主を驚かしている。

いづこよりいづこにかへる黒揚羽

鳥であろうが虫であろうが、自分で飼っていないければ生まれたところを知るはずもない。しかし可愛いものを見ると何処で生まれたのかなーと思いたくもなる。人間のようになん十年も生きていかなければならないものと違って、昆虫の生ある時間は限られている。なかなか目にするのが少ない黒揚羽を見たとき、ふと里子さんのやさしさが句になった。句の表面にあらわされていないだけ心にのこる。

花曇りホームに白いハイヒール

ホームとは老人ホームであろうか。句の様子からそうよんだ。

何となく鬱々とした春の日、履かないであろうホームの方にハイヒールが目についた。それも白いハイヒール。くらい方向にいきそうなホームの景色が白いハイヒールのおかれ方によつて明るく健康的な句になっている。組み合わせの妙つて素晴らしい

です。

猫にきき十一月に火を入れる

十二月猫とゆつたりふたりかな

家出した猫待つふたり冬めきぬ

そら豆はおたふくの顔猫と夫

日向ぼこしつぽでしゃべる猫とゐる

一連の猫の句、句集にはまだまだいっぱい猫の句は載っているが選んだ五句共に猫とのかかわりがやさしく伝わってくる。

寒くなつただらう、今火を入れるからね。なにもしていないお二人でも猫と居ると心穏やかに。春の時期になると二三日は帰つてこないこともある、もう寒いのと心配する。そら豆を見ているとふつくらしたご主人と猫の顔が同時にうかんだ。猫は熟睡している時をのぞいていつもしつぽを動かしている

ように感じるほどしつぽがうごく。猫の句をよんでいると本当に猫を大事にしていることがよく分かる。

ガタゴロと魔物住んでる冷蔵庫

くさめして何かぬけたか軽くなる

長き夜やホットミルクのむ虫おさえ

各停のホームにしばし日向ぼこ

布団干す裏に返して陽をためる

ビル嵐女の中のヒステリー

一人より二人がいいと春の夢

かたくなな頭にしみるお白酒

香り立つ路を煮る夫食べる妻

はや五十年夫とゐる夏の星

読後優しい心持ちをもつともつと持たなければと反省したところです。

あを柳集

兼題 出 佐藤喜孝 選

初舞台出し遅れる子の素足

幼稚園か小学校の学芸会の様子か。親のはらはら感がつたはる。素足の役とは何であらうか。

ビルを出て炎風浴びる丸の内

炎天下を歩いてきて百貨店や映画館に入るとほつとしたものである。しばらくみるとその恩恵も忘れ外に出てまた暑さに驚く。今年は節電と喧しかったが何とか乗切つたやうである。炎風はなほさら熱さうである。

肉体の迫り出すちからサンドレス

若い女性の夏の装ひの布は男より少ないやうに思へる。こちらも若い時はどきどきしたものだがこのごろは美しい美術品を見る心持である。「迫り出すちから」はそれを彷彿とさせる的確な表現。「迫り出すちから」も「おそろるべき君等の乳房夏来る」も所持者の自覚は薄いのかも知れない。

題詠「出」（順不同）

夏霧や出で湯に沈む父母と 吉弘 恭子

菊香る出札口につまづけり

出しおくれの言の葉悔いし凌霄花

やはらかき腕袖より出て灼けし

出来したと父母の顔大試験

公園の出口を探す落葉径

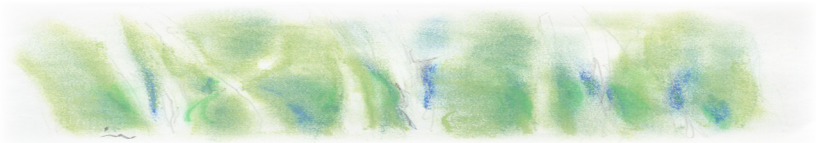
遠出して花のこみちに入りこむ

出嫌ひの母を押しやる祭笛

初舞台出し遅れる子の素足

出走馬揃ひて夏の雲白し 田中 藤穂

行列の木陰はみ出す籤売場





寝静まるキャンプや明日の日の出待つ

ビルを出て炎風浴びる丸の内

母の方から涼しき風の出づるよな

日出づるくにの国難夏の霧

肉体の迫り出すちからサンドレス

出立は弁慶格子夏祭

幼日の思ひ出の花夾竹桃

足弱がなほ出不精になる溽暑

冷房を出でて現に装へる

出納簿何度も遣り直す溽暑

梅雨出水商店街に砂袋

茄子胡瓜やつと整ふ初出荷

篠田 純子

木村茂登子

長崎 桂子

弟は出てはこられぬしやぼん玉

おひるからおでかけあぢさゐをつつき

夏の杉一番星を吐出せる

木を出でてまた木の下に秋の雨

道に出て道を眺むる秋の夜

雪舞ひ出す雪山に日のあたりゐて

木の葉浮き雪は沈める出湯かな

夜遊びに出かける前の水中花

町見えて茅の輪の出口見失ふ

兩足を家から出して夏の雲

筒姫は次女で出臍にはあらず

佐藤 喜孝



あとがき

九月場所の千秋楽を見た。私は大相撲が好きである。鼻負は岩風。最近では舞の海か。これらの相撲がYouTubeで見られることにびつくりした。今場所は琴奨菊・稀勢の里ら日本人勢も活躍して盛上がった。外人力士も大きいだけではなく小兵の隆乃山など多士濟々で土俵に活気が戻ってきたやうだ。今まで気にしてゐなかつた行事の立居振舞や衣装に目が行つた。土俵といふ舞台に欠かせぬ役柄である。衣装や軍配が美しい。デジタルテレビのおかげかも知れぬ。この場所で引退する行事さんが土俵上で目をばちばちしてゐやうに見えた。八百長問題がまだ尾を引いているやうだがこのやうな土俵が続けば好いなど願つてゐる。大相撲が元気を取戻しつつある中で野田新総理が白鵬に賜杯を渡してゐた。今までよりも少しでも長く続けばと願つてしまつた。そして大相撲のように難局を乗り越え日本も元気を取戻す日が近いやうな気がしてきた。

〈喜孝〉

新会員ご紹介

渡邊京子 様 〈渡邊友七氏の奥様〉

埼玉県さいたま市南区鹿手袋

ご厚志多謝

田中藤穂 様

渡邊京子 様

二〇一一年九月号

発行日 九月二十五日

発行所 東京都中野区中央2,50,3

電話 090,9828,4244

佐藤喜孝

印刷・製本・レイアウト

竹徳房

カット／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円 (送料共)／一年

郵便振替 00130,655526 (あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。